西鶴の世界

暉峻康隆著

木水社刊

西鶴の世界

昭和二十三年五月十日印刷
昭和二十三年五月十五日發行
昭和二十四年二月十八日第二版

西鶴の世界

定價金八拾圓

著者　暉峻康隆

發行者　今村　隆
東京都中央區
日本橋通三ノ八

印刷者　青山與三次郎
東京都港區
芝愛宕町二ノ八五

配給元　日本出版配給株式會社
東京都千代田區
神田淡路町二ノ九

發行所　株式會社　木水社
東京都中央區日本橋通三ノ八
電話　日本橋（24）四三七三

目次

西鶴の人と生涯……（一）
西鶴の文藝理念と方法……（二九）
西鶴の風俗描寫……（四六）
西鶴の愛慾小說……（六一）
A　愛慾の起承……（六一）
B　愛慾の歸趨……（七八）
西鶴の無感傷性……（九九）
西鶴の唯美主義的傾向について……（一一六）
西鶴と推理小說……（一三七）
西鶴と白石……（一五七）
西鶴晩年の生活と藝術……（一六五）
あとがき……（二〇六）

西鶴の人と生涯

1

日本の歴史がはじまつていらい、貴族・武家・僧侶といふ特權階級の手中に歸してゐた文學を、みごと民衆の手にうばひとつたのみならず、わが國においてもつとも達成された現實主義的作家井原西鶴は、伊藤仁齋の次子伊藤梅宇の「見聞談叢」によれば、俗姓を平山藤五といひ、大阪の裕福な町人の家に人となつたが、早く家業を手代にゆづつて文學に生涯をかけた。思ふに作家として用ひた井原姓は母方の姓ででもあらうか。墓は大阪市東區上本町誓願寺にあり、碑の表に「仙皓西鶴」、左側面に「元祿六年癸酉八月十日」、右側面に「下山鶴平・北條團水建」とある。同じ大阪で元祿七年十月に五十一歳で歿した芭蕉よりも一年早く、西鶴は五十二歳（置土產）で六年八月十日に歿したわけである。したがつて出生は寛永十九年といふことになる。

寛永末年といへば三代將軍家光の時代で、天主教と結びついた反幕府的な浪人群の活動を鎖國令

（寛永十三年）によつておさへる一方、國内に雌伏する封建領主に對しては參勤交替の制（寛永十二年）を設定して中央集權を確立し、幕府の威令はやうやく定まり、文化面における澎湃たる建設の氣運をむかへた時である。しかもこのさいとくに注目すべきことは、武士階級が中央集權を確立すると同時に現狀維持の保守的精神を擁せざるをえなくなつたのに對して、この期に入つて最下位ながら階級を形成した封建第四階級としての新興町人階級は、あらゆる制約を乘りこえて成長し前進せざるをえない立場に立たされたといふことである。十二世紀末、賴朝が鎌倉に武家政權を打ちたてていらい四世紀、いま十七世紀に入つてやうやくその政權が安定し、破綻をいとふ老成期をむかへた武士階級に對して、經濟をつかさどるべく新しく誕生した新興階級が、新しい近世文化の擔當者となつたのは當然といはねばならない。しかし新興階級としての彼等は、何の傳統も持ちあはさない。そのはじめ文化的に彼等は無垢であり、無智であつた。當然未來多き無垢なる彼等のために文化的な啓蒙運動が特權階級出身の知識人の手によつて開始された。寛永年間にはすでに松永貞德一派によつて、民衆詩としての俳諧の基礎がかためられつつあつたし、散文方面においても民衆の情操教育を目ざした平易な假名書きの物語「假名草子」が、しだいにその數をましつつあつた。

さうして出發した町人階級の教養が、眞に創造的な段階に達したのは、彼等の商業資本經濟がその態勢を完備した寛文年間のことであつた。中世末期、海外へ發展しはじめた彼等の意慾と財力は、

錢國令によつて國内に集約され、中央集權によつて解放された交通の自由、貨幣の統一等々の好條件にめぐまれて急激に資本經濟への道をたどりはじめた。さうして寛文期に入ると、河村瑞軒の手によつて海路百五十里の奥州から江戸への東廻航路と、下關海峽を迂廻して瀨戸内海より江戸に至る八百里の西廻航路の開拓に成功したかと思へば、大阪町奉行石丸石見守の手によつて、貨物運送をじんそくならしめるための問屋の制度が設けられ、金融の便をはかつて兩替商が設置され、金銀相場立の制定を見、さらに三都の商人合議の上、町飛脚問屋が設立され、大阪と江戸の飛脚商が協議して金銀遞送のいはゆる金飛脚が設けられるなど、大阪を根據地とする近世前期の商業資本主義の機構が確立されたのであつた。江戸においては菱川一派の手によつてもつとも民衆的な浮世繪が、大阪においては宗因・西鶴等のもつとも町人的な談林俳諧がそれぞれ寛文年間に發足したのは、資本主義的機構の確立にともなつて充足した彼等の文化的意慾の表現にほかならない。

しかしながらその無統制な商業資本經濟の膨脹は正貨の蓄積死藏を招來し、また一方的な海外貿易は正貨の國外流出をはばみえず、ために幕府の財政は破綻し、やがて西鶴の歿した翌々元祿八年には貨幣改鑄の秕政が強行されたのである。もちろん財政的に行きつまつたのは幕府だけではなく封建制度の下にあつてはどのみち生産とむすびつきえない商業資本主義も、いち早く飽和點に達したのである。大阪の町人出身の西鶴は、寛永から元祿はじめまで、經濟的にしたがつて文化的に上昇

の一途をたどつた町人階級とその運命をともにしたのみならず、もつともすぐれた彼等の代辯者として活躍したのである。

西鶴が俳諧を志したのは、彼自身の言葉（大矢數跋）によつて明暦二年十五歳のころのことであつたと知られるが、はじめから西山宗因に師事したのではなかつたらしい。明暦二年ごろの宗因といへば、大阪天滿宮の月並連歌の宗匠にすぎず、俳諧はまつたく連歌師の餘技で一幽と號し、貞門の古風にならつてゐたのであるから、とくに西鶴が結びつくべき必然性はみとめられないのである。多分西鶴が最初に師事したのは、その發句が鶴永の初號ではじめて入集した寛文六年刊の「遠近集」の撰者で可玖と號した貞門の西村長愛子あたりではなかつたかと思はれる。

寛文二年、二十一歳の年、西鶴は早くも俳諧の點者となり、同六年二十五歳の年、はじめてその作品が「鶴永」の號で前記の「遠近集」に入集してゐる。その句は、

こころ爰になきか鳴ぬか郭公

餝繩や内外二重御代の松

彦星やげにも今夜は七ひかり

といつたありさまで、いまだ貞門風に言語遊戯の域を脱してゐない。ところが三十歳、寛文十一年刊の高瀧以仙撰「落花集」に見える、

長持へ春ぞくれ行く更衣

といふ句になると、すでに談林風な人間主義傾向があらはれてゐる。俳諧師としての宗因の活躍が寛文中期以後めざましくなつてゐるといふ事實とにらみあはせて、この頃すでに西鶴は宗因門下に歸してゐたのではないかと思はれる。

こえて三十二歳延寶元年の六月に、彼は最初の撰著「生玉萬句」を刊行して、やうやく俳壇に頭角をあらはした。その自序にいふ。

或問何とて世の風俗しを放れたる俳諧を好るゝや。答曰世こそつて濁れり、我ひとり清り、何としてかその汁を啜り其糟をなめんや。(中略)朝于夕聞うたは耳の底にかひはへて口に苦を生し、いつきくも老のくりこと益なし。故に遠き伊勢國みもすそ川の流を三盃くんで醉のあまり賤も狂句をはけは、世人阿蘭陀流なとさみしてかの萬句の數にものそかれぬ。されとも生玉の御神前にて一流の萬句催し、すきの輩出座その數をしらす。十二日にしてこと畢れり。

これによると西鶴らは當時すでに貞門の古風にあきたらず、新風を好んで保守派にひんしゅくされ、阿蘭陀流の名をもつてよばれ、諸派の俳人を網羅した萬句俳諧の興行にも除外されたので、憤激した西鶴は一黨をひきゐてみごとに一派の萬句俳諧を興行したのであつた。その西鶴の背後に宗因がゐたことは、萬句の最後に追加された一卷に出座してゐることによつて知られる。

おなじ年の十月、西鶴は「哥仙大坂俳諧師」を自筆自畫で編纂上梓してゐるが、貞門談林の俳人三十六人の肖像と發句を收めた中に、西鶴（當時鶴永）はみづから肖像を描き、さきに「落花集」に入集した更衣の句を配してゐる。西鶴は一見きはめて豪放で、こんな手のこんだ仕事は不向きな人柄のやうであるが、事實は本書をはじめとして延寶四年十月には「古今俳諧師手鑑」の大著を、延寶六年十一月には附合集「物種集」を、天和元年正月には肖像入りの役者評判記「難波の顏は伊勢の白粉」を、貞享元年十月にはおなじく肖像入りの「古今俳諧女歌仙」を、元祿二年正月には挿繪入りの道中記「一目玉鉾」をといふ風に、手のこんだ編纂物をいともたのしげに樂々とこなしてゐるのである。

しかしいづれにしても西鶴が自畫像と自句を加へて「哥仙大坂俳諧師」を出版したといふことは「生玉萬句」のくはだてとにらみあはせて、當時の西鶴がいかにアンビシヤスであつたかを物語るものであらう。

それから二年後、延寶三年三十四歲の夏のころ、それまで用ひてゐた鶴永の號を改めて西鶴と稱することになつた。同年四月、宗因の判で大阪談林の中堅俳人九人の百韻を收めて新風を誇示した「大坂獨吟集」ではまだ鶴永の號を用ひてゐるが、同年十一月刊、伊勢村重安撰の「糸屑集」には西鶴の號で入集してゐるから、改號は四月以後、夏秋の間のことであらう。さらに延寶六年（三十

七歳）刊の獨長庵石齋撰「俳諧珍重集」に收められた獨吟百韻の揚句に、

唯花は見えたとをりの捨坊主

三十七の春もわらんべ

とあり、延寶六年三十七歳の春には剃髪法體してゐたことがしられるが、百韻の成立時期から考へて野間光辰氏が指摘されてゐるやうに、延寶五年の冬に法體したものであるらしい。一たい普通に法體するといふ行爲は、消極的・隱遁的生活態度の表現と解されるのであるが、中世詩人の場合とちがつて自己のぞくする階級の繁榮の只中にゐた西鶴の場合は、宗教的な意味などはまつたくなく、かへつて積極的に一さいをすてて民衆詩俳諧の道に專念しようとする意志表示にほかならないものであつた。不朽なる彼の筆名となつた西鶴改號のことにつづくこの積極的な意志表示によつて、西鶴は名實ともに宗因門下の俊秀としてみとめられるに至つた。じつさいこの頃から大阪俳壇における彼の俳諧活動はめざましいものとなつてゐるのである。

それにしても修業時代ではあつたにちがひないが、十年にあまる鶴永時代の業績はあまりにもとぼしい。よくいはれる西鶴の旅行はこの期間のことではなかつたかと思はれる。「見聞談叢」にいふ。

名跡を手代にゆづりて僧にもならず、世間を自由にくらし、行脚同事にて頭陀をかけ、半年程諸方を巡りては宿へ歸り……。

旅に出て半年も大阪を留守にするやうな生活のできる時期は、ほとんど業績を殘してゐない鶴永時代をほかにしてはありえないのである。ところがそれほどの大旅行をしたはずの西鶴に紀行文らしいものが殘つてゐない。わづかに元祿二年刊の道中記「一目玉鉾」における風俗描寫に痕跡をとどめてゐる程度である。これは西鶴の旅に求めるところが、自然ではなく人間であつたからである。「西鶴諸國はなし」の序で、「世間の廣き事國々を見めぐりてはなしの種をもとめぬ」といつてゐるやうに、自然美よりも限りなき人間の生態に心をひかれた彼の近世町人的な旅の體驗が、それにふさはしい形成、すなはち小說の中に生かされたのは當然であつた。

「一代男」における簡潔ではあるがリアルな諸國の風俗の描寫もそれであるし、「西鶴諸國はなし」や「懷硯」に盛られた諸國の說話も旅の收穫であらう。ことに「一代女」卷三の一節で、

美女美景なればとて不斷見るにはかならずあく事、身に覺て一年松嶋にゆきて、はじめの程は横手を打、見せばや爰哥人詩人にと思ひしに、明暮詠めて後は千鳩も磯くさく……。

とあるなどもまた、彼のはからずももらした旅の實感であらう。「一代男」以下の諸作品を豐饒ならしめてゐる地方の風俗描寫や豐富な說話は、まことに鶴永時代の旅のたまものにほかならない。

2

いつでも思ひ立つた時にふらりと旅に出て半年あまりも留守にするといふやうな生活は、まだ無名でろくに門人もない鶴永であつたからこそできたのであつて、「生玉萬句」や「哥仙大坂俳諧師」を出し、さらに西鶴と改號し、ついでに法體して俳道精進の意志表示をするころになると、西鶴の俳壇的地位も重きをくはへ、門人も多くなつていつた。延寶五年四月十一日附で豊後の門人中村西國に「俳諧之口傳」一冊をさづけてゐるのをみても、當時すでに西鶴の門人が地方にもおよんでゐたことがしられるのである。西鶴の身邊やうやく多事、もう鶴永時代のやうに無責任なへうへうたる生活はしてをられない。延寶五六年ごろからホームグランドにおける西鶴の俳諧活動は目にみえてはげしくなつていく。

この頃から小說の第一作「好色一代男」を書いた四十一歳、天和二年のころまでが俳諧師西鶴の全盛時代であるが、その西鶴の俳諧活動はいはゆる矢數俳諧を中心に展開してゐるのである。

延寶五年、三十六歳の五月二十五日、西鶴は大阪生玉本覺寺において一日一夜に獨吟千六百句を興行し「西鶴俳諧大句數」と題して上梓した。これはいふまでもなく寛文二年と同九年の兩度にわたり、尾州藩士星野勘左衞門が京都方廣寺の三十三間堂で大矢數をもよほし、二度目の通し矢八千本をもつて天下一の譽をえたことにヒントをえた興行であるが、自序によるとそのころ諸方で量をほこる速吟が流行し始めたので、かねて輕口速吟をほこつてゐた西鶴は默することができず、大矢

數ならぬ大句數をこころみて天下一の名のりをあげたのであつた。アンビシャスな西鶴、つねに第一人者であらうとするはげしい西鶴の性根をここにも見るのであるが、しかし本來抒情詩形である俳諧（連句）において量をほこり速吟をほこるとは一體いかなることを意味するのであらうか。もちろん抒情詩形といつても戀の附句を百韻に四ヶ所まで要求する連句は、發句とちがつてよほど叙事詩的であるべきはずのものであるが、しかし連句は屈折と變化をたふとぶことによつて連句たりうるのである。それにもかかはらず一日一夜千六百句の速吟といふことになれば、屈折と變化をもちうるはずもなく、ただ宗因をはじめ談林の俳人たちが以前からうたひつつあつた新時代の風俗をパノラマ風に描寫していくよりほかはないのである。

浮世かなひとり娘を持あまし
思ひと苦とをつつる繪双紙
通ひ路は二條寺町夕詠
川原の床は小歌三味線
ひらに是へそれへ提重送られて
拙者が勝手にすみ公事の宿

盗人と思ひながらもそら寢入
親子の中へあしをさしこみ
胸の火やすこし心を置こたつ
揚屋なからもはしめての宿
なんと亭主替つた戀は御さらぬか
きのふもたはけが死んだと申

このやうに屈折と變化にとぼしい風俗詩となつてしまつたのは當然といはねばならない。歴史的社會的にいへば、消費的な文化面に局限された上昇期の上方町人の生命力が、西鶴といふ強力な個性を通じてフレッシュな自分たちの生活をうたひまくつてゐるのであるが、一歩しりぞいて連句の本質に思ひを至す時、それはまさしく詩の墮落である。花火のごとく生命の短い談林俳諧の崩壞の第一歩がここにはじまる。その資質がよくさういふ叙事詩的傾向とマッチして散文へ轉出することのできた西鶴の個人的成功をもつて、談林俳諧ぜんたいの運命をはかるべきではない。

人を制するに力をもつてすれば、かならず力の反擊があるべき道理である。星野勘左衛門の通し矢八千本のレコードも、貞享三年に紀州藩士の和佐大八に破られたやうに、西鶴の大句數興行より四ヶ月目、延寶五年九月二十四日、大和多武峯の俳僧月松軒紀子は、奈良元興寺極樂院において千八

百句獨吟に成功して西鶴のレコードを破つた。おつかけてまた翌々延寶七年三月五日六日の兩日、西鶴の俳友大淀三千風は、その故郷仙臺において矢數俳諧を興行し、三千句獨吟を成就してふたたび西鶴のレコードは破られた。かねて京都談林の雄菅野谷高政を背景として西鶴にいどんだ大和の紀子にこころよからず思つてゐた西鶴は、俳友三千風の獨吟三千句にはかへつて跋文をよせ歌仙一卷をおくつて激賞したのであつたが、二度にわたつて傷つけられたほこりは醫すべくもない。さうして西鶴は翌延寶八年の季節もおなじ五月の七日、所もおなじ大阪生玉寺内において再度の矢數俳諧を興行し、ふたたび追隨するものなき一日獨吟四千句を成就したのであつた。

惣て此道さかんになり、東西南北に弘る事、自由にもとづく俳諧の姿を我仕はじめし已來也。

翌天和元年四月に刊行されたこの「大矢數」の跋で、西鶴は右のやうにその抱負をのべてゐる。自由にもとづく俳諧とは、いふまでもなく中世的な傳統をすてきれないでゐる古風貞門の桎梏からの解放、すなはちゆたかな生命力にあふれた近世町人の生活を奔放自在にうたひ上げる新詩風を意味するものにほかならない。單に量的な誇示にとどまらず、質的にも十分な自信をもつて事に當つたことがしられるのである。しかしながら一日十二時間あまりに四千句といへば、そのことに沒頭したとしても一分間に四句あまりの速吟である。當然内心の美的感動を形象化する豫猶のあらうはずはなく、ただひたすら對象そのものの興味でおしていくより仕方がない。

をとこと合點で女郎花さく
心中をたてりと思へば笑しい迄
夜前も門で聞いてゐました
西へ行く顏こそ知らぬ郭公
雲晴れねども卽身成佛

なりふりのあの御所染はいらぬもの
髮はきつてもどこやらはまだ
厄病の業は殘らせ給ひけり
賴みすくなき四十二の年

此一騷ぎひや酒のうへ
皆かこゐ十人よふで何程ぞ
契りの寢卷枕さへない
小屏風のあとを叩て借に行